



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	MYP評価訪問( fulltext )
Author(s)	星野,あゆみ
Citation	国際中等教育研究 : 東京学芸大学附属国際中等教育学校 研究紀要(8): 135-139
Issue Date	2015-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/140175">http://hdl.handle.net/2309/140175</a>
Publisher	東京学芸大学附属国際中等教育学校
Rights	

## MYP 評価訪問

星野あゆみ (MYPコーディネーター)

### 1 はじめに

東京学芸大学附属国際中等教育学校（以下、本校）は2010年2月に国公立初の国際バカロレア機構（IB）のIBワールドスクール（IB World School）として認定されて以来、初めての評価訪問（Evaluation Visit）を2014年2月に受けた。2010年11月以前に認定を受けたMYPの認定校は、認定から4年目に初めての評価訪問があり、それ以降は5年ごとの実施となる。評価訪問は認定継続のための要件でもあり、IB側からのサービス事業でもある。定期的にプログラムの実践状況をIBと学校の双方で確認すると同時に、学校もまた生涯学習者として発展し続けていくための自己評価と振り返りの重要な機会である。

### 2 評価のモニタリング

評価訪問は3日間の訪問であるが、この3日間だけが重要なのではなく、訪問に至るまでのプロセスが重要である。（認定から評価訪問までの流れは図1を参照。）評価訪問を受ける前に実施が義務付けられているのが評価のモニタリングである。IBの『MYP:原則から実践へ』（p.117）にあるように、これは学校が「評価済みの生徒の作品のサンプルをIBに送付し、長年の経験のあるMYPモデレーターによるフィードバックを報告書として受け取ること」ができる機会である。

評価のモニタリングは評価訪問の8か月前までの9月1日から3月15日までの間に実施することになっている。2010年2月に認定の知らせが届いた際に、本校の評価訪問は2014年1月と記載されていたので、評価訪問から逆算して、2013年3月実施を計画した。評価のモニタリングはMYPコーディネーターがアクセスすることのできるIB Information System（IBIS）から登録することになっていて、本校は2012年6月に登録をした。登録を終えるとまもなく請求書がメールで送られてくる。評価のモニタリング登録費とモニタリングを受ける教科数に応じた教科費合わせて1036イギリスポンド（約14万円）の支出となった。

提出すべき資料の詳細は『MYP:原則から実践へ』に掲載されているが、各教科共通で提出した資料の概要は以下の通りである。

- ① MYP教科群の評価規準ごとの評価課題2種類の指示プリントとルーブリック
- ② ①の評価課題に関係する単元プランナー
- ③ ①の評価課題の生徒4名分のサンプルと教員が付与した評価
- ④ IB評価のモニタリング用書式
- ⑤ その他、参考資料

評価のモニタリングはMYPのどの学年の資料を提出してもいいことになっているが、本校では、4年生、MYPの最終学年の資料を提出することとした。なお、評価のモニタリングにおいては、提出する生徒の作品のサンプルは翻訳したもので構わない。ただし、本校では生徒作品の翻訳は外注したため予想以上の経費がかかる事態となった。この点は今後の評価訪問の際には気をつけたい点である。提出すべき資料は教科群ごとに異なるモデレーターに提出する。モデレーターの氏名、住所がIB側から送られてくるが、本校はオンラインストレージサービスのドロップ

プボックスを活用したので、郵送の手間は省けた。

評価のモニタリングの準備は IBIS に 2012 年 6 月に登録する前から始めた。2012 年 5 月初旬に校内研究会において MYP コーディネーターが評価訪問と評価のモニタリングに関する概要を全校教員に対して説明する機会を設けた。同じ 5 月下旬には提出する教科の 4 年生の授業担当者を集めて打ち合わせを行った。その際、他校の訪問に来日していた IB アジア太平洋地域 MYP スクールサービスマネージャーに来校してもらい、質疑応答の時間をとることが出来たのは大変有意義であった。同年 12 月を提出資料の校内提出期限とし、年明けから翻訳作業に入った。2013 年 2 月にはモデレーターの情報に到着し、3 月にドロップボックスへ移管した。あとで判明したことであるが、登録の際に、一部の教科の登録がテクニカルな問題で登録されていなかったため、それらの教科のモニタリングは 9 月まで待つことになった。評価のモニタリングの教科ごとの報告書は 2013 年 4 月から 2013 年 12 月までの間に順次届いた。

教科ごとの報告は英文で書かれた全文と要約を日本語翻訳して各教科に配布し、全教科の報告の概要は校内研究会で伝達し共有した。報告書は一般的なコメント、課題に関するコメント、評価に関するコメントおよび推奨事項の 4 部構成で、教員が付与した成績に関して具体的なアドバイスが記載されていることもあった。(美術科に届いたコメントの抜粋は資料参照。)

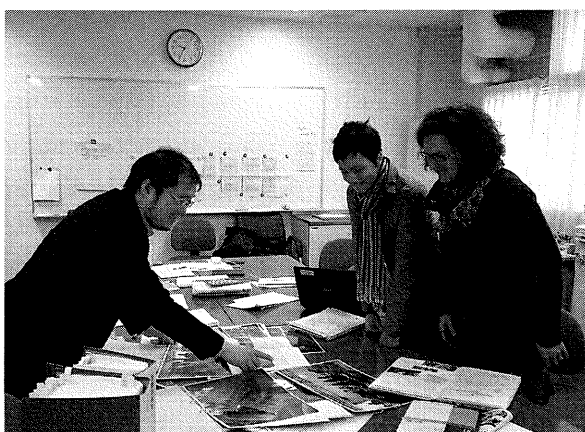
### 3 評価訪問

評価のモニタリングの報告書が届き始めた 2013 年 5 月に IB から評価訪問の日程の調整の打診が来た。当初は 2014 年 1 月の予定であったが、年間行事予定との関係で日程は 2014 年 2 月 19-21 日と決定した。評価訪問の準備にむけてオンラインの文書管理システムである IBDOCS へのアクセス権を与えられる。システム内で事前に提出しなくてはならない文書をアップロードする仕組みである。また、ベースキャンプという名称のプロジェクトマネジメントツールで IB の担当者、訪問団員などとメールで打ち合わせを行う。

評価訪問の 1 か月前までに検討して、完成させて、アップロードしなくてはならない自己評価表を OCC からダウンロードして、校内での検討を始めたのが、評価のモニタリング報告書が全て届き終わった 2013 年冬である。自己評価表は学校の状況やプログラムの発展状況や学校のアクションプランを書き込む部分と『プログラム基準と実践要綱』にある基準 A (理念)、B (組織) C (カリキュラム) の各項目に対しての本校の取り組み状況を 4 段階で評価する部分に分かれていた。『プログラム基準と実践要綱』に沿った自己評価の部分のうち、基準 A (理念) に関するものは校長と副校長に、B (組織) と C (カリキュラム) に関するものは MYP の教科群ごとにまず自己評価してもらい、それを学校の評価として MYP コーディネーターが中心となり校長および副校長と総括した。その他の部分は MYP コーディネーターが書き込み、校長および副校長に確認をお願いした。評価訪問および自己評価表の各教科にお願いする部分に関する説明と作業の一部を、校内研究会の時間を使って 11 月に行った。12 月には正式に IB から評価訪問の訪問団の紹介があり、本校には評価訪問のためのトレーニングを受けたベトナムとラオスのインターナショナルスクールの教員が配属された。1 月 19 日までに自己評価表、モニタリング報告書などの資料をアップし、訪問団のホテルの予約をし、3 日間の予定表を組んだ。3 日間のおおまかな流れは以下の通りである。

- ① 1 日目 (8:30-17:00)
  - 学校管理職との面談
  - 学校管理団体との面談

- コーディネーターとの面談
  - 学校施設見学
  - 各教科との面談
- ② 2日目(8:30-17:00)
- 各教科との面談
  - 図書館司書との面談
  - 特別支援教育関係者との面談
  - 生徒との面談
  - 保護者との面談
  - 授業参観
- ③ 3日目(8:30-12:30)
- 校内 MYP 委員会との面談
  - 学年主任との面談
  - コーディネーターとの面談



評価訪問の当日は、モニタリングで提出した4年生の資料およびその他の学年の資料も同じようにそろえて教科ごとにプリントアウトをファイルして用意した。また、今回は初めて通訳は校内で準備するのではなく、外部の通訳者を雇うように助言を受けたので、3日間の通訳を手配した。

評価訪問は、これまで本校が受けた2回の訪問と同様に和やかな雰囲気の中で行われた。「審査」というよりはどのように工夫をしたらよりよい授業が展開できるか、より効率よく組織として機能するかなどを共に考えてもらえる「勉強会」であった。4月下旬には評価訪問学校報告書がIBから届いた。いくつかの指摘事項はいくつかあったが、認定取り消しに関わるような重大な指摘事項はなかったとのことで、次回の評価訪問は5年後となり、2019年2月頃予定している。報告書の内容は教員会議の席で報告、説明を行った。教科に届いた報告書の推奨事項を実践すべくプランを教科で立案し、すぐに実践できる点は実践し始めることとした。

#### 4 終わりに

2014年2月の評価訪問の準備は2012年6月のIBISでの評価のモニタリングに始まり1年半に及んだ。初めての評価訪問を終えて、これでMYP認定の一連の動きを一通り経験したことになる。今後はこの評価訪問を5年ごとに受けていくことになるわけだが、このプロセスを通して、常に学校も実践を振り返る機会が与えられことを有難いと痛感している。IBは評価訪問を通して世界中の認定校におけるプログラムの質の保証をしているのであるが、学校にとっては評価訪問は認定後、時間が経過すればするほど、実践がマンネリ化したり、教員の入れ替えて当初の動機付けが低下したりする中で、自らの実践をまた見直し、改善していく原動力になる。資料を整える作業の中で教員間で議論をする時間も、授業内容を今一度見直すいい機会となった。評価訪問費3850米ドル(約40万円)を含めて膨大な額になったが、それだけの価値はあったと思っている。

2014年9月から北半球のインターナショナルスクールを皮切りにMYPの新プログラムデザイ

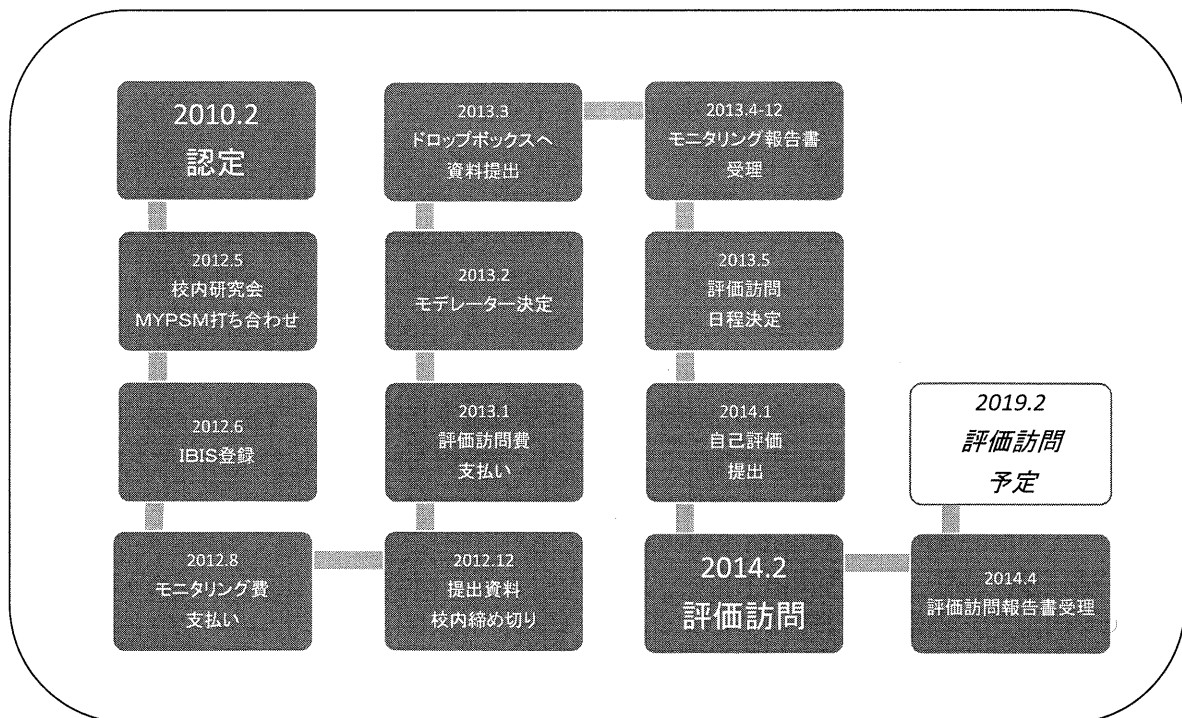
ン(MYP the next chapter)の実践が始まっている。本校でも2015年度4月からこのデザインに則っての実践を開始する予定である。学習指導要領の改訂と同様に、MYPの改訂への対応を目指して、また新たな挑戦が始まっていく。

参考文献

International Baccalaureate Organization (2011)、*MYP：原則から実践へ*、IBO Press, p.117.

International Baccalaureate Organization (2010) *Programme Evaluation Guide and Self-Study Questionnaire; Middle Years Programme*, IBO Press

図1 認定から評価訪問までの流れ



資料 美術科に届いたコメントの抜粋

## **A General comments**

The monitor would like to thank the school for submitting this digital sample. The sample consisted of work from four students and contained two tasks; “Exploration and design of decorative pattern” and “Exploration and production of oil paintings”, which addressed MYP visual arts assessment criteria A, B, C and D.

## **B Comments on the assessment tasks and background information**

### **Exploration and design of decorative pattern**

This task required students to complete research and gain understandings of Japanese decorative patterns of the Asuka period and Asian decorative patterns. They were then asked to design and produce a Furoshiki that incorporates decorative patterns. Students completed all visual and written studies in their developmental workbooks.

Students completed reflections and evaluations based on the creation of their artwork. They related these reflections to feedback they had received throughout the project.

## **C Comments on the use of assessment criteria**

Criterion C was used to assess student reflections, which were connected to teacher feedback and provided good understandings of the various techniques and processes, as well as historical information involved. The reflective work provided in the sample displayed good practice and students were clearly thinking ahead as well as analysing what they had done in the project to date. The monitor was in agreement with the levels awarded for both tasks. This sample demonstrates good assessment practice. The task shows evidence of being a very effective MYP visual arts project.

## **D Recommendations**

The monitor would like to make the following recommendations:

- When determining student levels, the monitor noticed the school referred to the mean or average levels of the criteria levels used over several tasks. This should be avoided, and a holistic level should be determined based on the most appropriate level for the student being assessed.